「男、突っ走る！」

第69回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（22）　『オフィスツリーイン』代表

福沢　瑞枝（22）　元名古屋芸術専門学校学生
長井　夏美（22）　元名古屋芸術専門学校学生
植野　雪奈（22）　元名古屋芸術専門学校学生
船倉　篤志（22）　元名古屋芸術専門学校学生
奥村　裕司（23）　元名古屋芸術専門学校学生
山口　拓海（22）　元名古屋芸術専門学校学生
安永　和也（22）　元名古屋芸術専門学校学生

1　木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンで仕事をしている。

N「フリーペーパー『デイズ』の創刊準備号が完成し、僕は近隣の店舗やスポンサーに配布をしながらも、次の春号、つまり正式な創刊号に向けての準備に追われていた。また、季節柄忘年会シーズンとなっており、専門学校の集まりがあるという連絡をゆきちゃんから受け、また映画製作で今年の夏にお世話になった山岡プロデューサーからも忘年会の誘いの連絡をいただき、僕は忘年会を楽しみに、仕事をする毎日を送っていた」

2　名古屋駅・バス停

高速バスが停まっており、雅也や乗客たちが次々と乗り込んでいく。

3　高速道路を走るバス

N「十二月の中旬、僕は山岡プロデューサー

主催の忘年会に出席するために、高速バスで東京へと向かった。脚本を担当した映画に出演したキャストの方や、スタッフの方々、そして山岡プロデューサーと繋がりのあるタレントや監督といった同業者の方たちも集まるというので、冒険心旺盛な僕にとってはいろんな方と出会えるのが楽しみだった」

4　バスタ新宿・表

N「午前中名古屋を出発した高速バスは、途中二回のサービスエリアでの休憩を挟んで、夕方には新宿駅隣接のバスターミナル、バスタ新宿に到着をした」

雅也が出てくると、スマホを取り出し、『新宿駅』の写真を撮る。

ＳＮＳに投稿をする雅也。

雅也の声「久方ぶりの東京です」

スマホを鞄にしまうと、歩いていく雅也――と、スマホに着信がかかってく

る。

雅也、もう一度鞄からスマホを取り出す――着信は瑞枝からである。

雅也「みずちゃん……？　（と電話に出て）もしもしみずちゃん？」

瑞枝の声「うっちー、今新宿にいるの？」

雅也「うん。こっちでね、忘年会があって、さっき高速バスで新宿着いたばっかなの」

瑞枝の声「私さ、今新大久保にいるんだけど、何でも車両故障で電車止まっちゃって、新宿に向かって歩いてるの」

雅也「え、じゃあこっち来る？」

瑞枝の声「忘年会って言っても、まだ時間あるんじゃない？」

雅也「まあね。だから、時間までちょっとこの辺りフラフラして時間潰そうと思ってたの。六時半にアルタ前だから、まだ二時間近くあるんだよね」

瑞枝の声「じゃあ、どっかでお茶しない？」

雅也「うん、良いよ」

5　新宿駅・南改札口

雅也が待っている――スマホに着信が来る。

雅也「もしもし。今？　えっとね、新宿駅の南改札口にいる」

と、瑞枝の声がする。

瑞枝の声「うっちー、後ろ」

雅也、振り向く――スマホを耳に当てたままの瑞枝が立っており、手を振る。

雅也「みずちゃん」

瑞枝「（電話を切って）おまたせ」

6　喫茶店

雅也と瑞枝が話している。

雅也「元気そうだね、みずちゃん」

瑞枝「うっちーと会うのって、夏に眞榮田たちと会って以来？」

雅也「そうなるね。まああの時は、ちょっと前に加藤たちとも会ったけど」

瑞枝「そうだったね」

雅也「学生時代は、ほぼ毎日顔合わせてたのにね。もうちょっとで一年経っちゃうんだ。早いね」

瑞枝「一年前って、ちょうどうっちーが映画の脚本が決まった頃だっけ。年明けには、一緒に熱田神宮行ってさ」

雅也「行ったね。すごい前のような感じがするけど」

瑞枝「いろいろ追われてると、時間なんてあっという間に経っちゃうよ。あ、そういえばＳＮＳ見たよ。地元のフリーペーパー立ち上げたんだって」

雅也「まあね」

瑞枝「相変わらずの行動力だね。まさか一人でやってるの？」

雅也「うん。スポンサー獲得も、記事の執筆もページのレイアウトもＳＮＳの投稿も全部。編集長兼ライター兼デザイン兼カメラマン兼営業ってところかな」

瑞枝「よく体壊さないね、そんなにやって」
雅也「体が資本だから、気を付けてはいるけどね。まあ一人でやってることもあるから、人間関係のストレスはそんなにないから良いんだけど、その分一人だからやることが多くてね。もう分身が欲しいぐらい」
瑞枝「専門学校の時だって言ってたじゃん。やること多すぎて分身欲しいって」
雅也「何かそんなようなこと言ってた気がするわ」
瑞枝「そのフリーペーパー、ある？」
雅也「あるよ」
と、鞄から『デイズ』を取り出し、瑞枝に渡す。
瑞枝「ありがとう。（と中身を見ながら）私さ、ファッション雑誌とかタウン誌読むの好きなの。だから、うっちーが自分でフリーペーパー作ってるっていうのを見たから、欲しいなと思って」
雅也「年末の忘年会で、あつぽんにも渡さな

きゃな。忘れないように持ってかないと」
瑞枝「あつぽん？」
雅也「あつぽん、俺のファン一号なの。専門学校の時から、作った作品は全部持ってててくれてて、自分の部屋の本棚の一角に『うっちーコーナー』っていうのを作ってくれてるの」
瑞枝「そういえば、一年生の頃からあつぽん、うっちーの作品読んでたね」
雅也「『白寿の万年筆』とかね」
瑞枝「あったね、そんな作品。あれ、確か小説だったけどさ、せっかくならシナリオにもしてよ。私、あの作品好きだった」
雅也「ありがとう。いつか、リメイクしようかな、あの作品を原案にして」
瑞枝「楽しみにしてる」
雅也「みずちゃんって、年末の忘年会来るよね？」
瑞枝「うん。ゆきちゃんから連絡もらった」
雅也「今やすっかりゆきちゃんに幹事任せき

りになっちゃってる。学生の時はさ、あつぽんが幹事やる飲み会があったり、俺も幹事やってたこともあったけどさ」

瑞枝「しょうがないよ。あつぽんは京都だし、うっちーだって自分の事務所のことで手一杯だもん。私たちの集まりの幹事までやってたら、それこそ体持たなくなっちゃうよ」

雅也「まあ、それもそうか」

瑞枝「うっちーは、自分で抱えすぎなの。だから、頼れるところは頼っちゃえば良いの。うっちーの体は一つしかないんだし、うっちーが体壊したから、誰がうっちーの代わりするのって話になるでしょ」

雅也「そうだね」

瑞枝「無理しちゃダメだよ。うっちーは人が良すぎて、抱え込んじゃうんだから」

雅也「『とんちゃん』に最後に言ったときにもらった手紙にも、そうやって書いてくれてたね」

瑞枝「そうだっけ？　私、手紙でどんなこと

書いたかなんて覚えてないわ」
雅也「まあ俺も、みずちゃんに渡した手紙に何て書いたか覚えてないわ」
瑞枝「『とんちゃん』の大将と若女将、元気にしてる？」
雅也「そういえば、最近行ってないな。地元にいるとさ、移動手段車だから飲めないしね。あ、でも前に父親が会社の人と行った話は聞いた」
瑞枝「うっちーのお父さんからもらった梅酒、まだ全然残ってる」
雅也「ああ。あの時は、失礼しました。荷物になっちゃったね」
瑞枝「大丈夫。うちもさ、父親がよく言うの。『うっちー君は元気にしてるか』って」
雅也「確か、一年生の卒業進級制作展の時にご挨拶させてもらったっけ」
瑞枝「そうそう」
雅也「いきなり肩組んできて、そのフレンドリーなおっさんはどこの社長さんなのか、

それとも誰かのお父さんなのかなって思ってたら、まさかのみずちゃんのお父さんだったって知ったときは驚いたけど」

瑞枝「あの時はごめんね、うちの父親が」

雅也「良いよ良いよ。俺、年上の人と話すこと慣れてるから」

瑞枝「時間大丈夫？」

雅也「（時計を見て）まだ大丈夫。だって、アルタってすぐそこでしょ」

瑞枝「方向音痴のうっちーが、すぐにアルタ前まで行ける？」

雅也「そう言われると不安になるよね」

瑞枝「そろそろ出ようか」

雅也「うん……」

瑞枝「寂しいの？」

雅也「まさか」

瑞枝「まあ、二人で話すのはあれ以来だもんね」

雅也「……」

×　×　×

〈フラッシュ〉
駅の改札前で抱き合う雅也と瑞枝。
×　×　×
雅也「……」
瑞枝「大丈夫だって。また再来週の忘年会で会えるんだから」
苦笑して頷く雅也。

7　名古屋駅・金時計前（二週間後）
待ち合わせをしている人で溢れている
――その中で雪奈、裕司、拓海、和也、その他同級生や後輩たちが待っている。
拓海「久しぶりにこっち帰ってきたけどやっぱり人多いな、名古屋って」
裕司「まあ、忘年会シーズンってこともあるんだろ。この辺りと栄なんて、人でごった返してるだろ」
雪奈「こんなに人が多いとは思ってもみなかったけどね」
和也「みんな同じように、金時計集合ってな

るんだよ」

と、雅也と瑞枝がやってくる。

雅也「やっほー、お疲れ」

瑞枝「お待たせ」

裕司「おお、みずちゃんだ」

和也「貴重な福沢さんだ」

瑞枝「久しぶり。（と雪奈に）ゆきちゃん、今日は幹事ありがとう」

一同「ありがとうございます」

雪奈「良いの良いの。みんなが楽しんでくれたら、それで」

雅也「今日は随分参加者多いね」

雪奈「そりゃ忘年会だもん。同級生も後輩も集まれば楽しいなと思って」

雅也「ごめんね、結局ゆきちゃんに任せるようなことになっちゃって」

瑞枝「あれ、今日はもしかして社長のおごりですか」

雅也「みずちゃん！」

裕司「あざっす」

拓海「いやさすが社長、太っ腹」
雅也「領収書は『オフィスツリーイン』でって、やかましいわ！」
和也「冴えてるね、うっちー」
雅也「久しぶりだからね、こうやっていじられるの」
瑞枝「キレキレだよ、相変わらず」
雪奈「あっぽん遅いね」
裕司「何やってんだ、あいつ。うっちー社長やみずちゃんを待たせるなんて、何て奴だ」
と、篤志が走ってやってくる。
篤志「おつかれっす！」
裕司「おお、やっと来た」
篤志「ごめん。意外と新幹線口から距離あった」
雅也「あっぽん、後で新作渡すからね」
篤志「ありがとうございます！」
瑞枝「あっぽん、久しぶり」
篤志「福沢さん……お久しぶりです」
雅也「え、そこ師弟関係か何かだった？」

裕司「これで全員揃ったかな」
拓海「そうじゃない」
雪奈「あ、ちょっと待って。実は、もう一人来てるの」
和也「え、けどグループＬＩＮＥのメンバーはこれで全部なんじゃないの？」
雪奈「サプライズで呼んだの。先月私の誕生日会のとき、サプライズで男子が来てくれたでしょ。そのお返しってわけじゃないんだけど、男子勢が喜ぶ人も呼んじゃいました」
篤志「誰？」
雪奈、振り向いて手を挙げる――柱の陰に隠れていた夏美が姿を現して、一同のもとにやってくる。
男子一同「なつ姐さんッ」
夏美「久しぶり、みんな」
裕司「いや、見事に表参道の女になってるわ」
夏美「言い方ね、おっくー」
雪奈「誘ったら、ぜひ参加したいって」

瑞枝「何だ、この間会ったとき、何も言って
なかったじゃん」
夏美「せっかくだから、みずちゃんも驚かせ
ようかなと思ってね」
瑞枝「なつ姐さん（と夏美に抱き着く）」
夏美「みずちゃん（と頭を撫でる）」
篤志「ズルいな、福沢さんだけ。俺もやって
もらおう」
裕司「いや、俺が」
拓海「ここは俺でしょ」
和也「ちょっと待った。ここは俺が先に」
雅也「こういうのは、俺がやっぱり一番って
決まってるでしょ」
雪奈「こら男子」
一同「はいッ」
雪奈「そろそろお店行くよ」

8　居酒屋（夜）

雅也、瑞枝、夏美、雪奈、篤志、裕司、
拓海、和也、その他同級生や後輩たち

が飲みながら談笑している――雅也と
瑞枝が隣同士で飲んでいる。
雅也「みずちゃん、いつまでこっちいるの？」
瑞枝「年明け五日に帰る予定」
雅也「そっか……」
瑞枝「どうかした？」
雅也「いや、ゆっくりいるんだったら『とん
ちゃん』行こうかなと思ったんだけど、電
話で聞いたら七日まで休みだって言うから」
瑞枝「あ、そういえば『とんちゃん』の話、
この間したばっかりだもんね」
雅也「残念だわ」
瑞枝「またいつでも行けるって」
雅也「うん……」
瑞枝「……私さ、今でもあの時嬉しかったん
だよ」
雅也「……」

9　居酒屋『とんちゃん』・表～駅（回想）
雅也「俺……みずちゃんのこと、好きだった」

瑞枝「え……」

×　×　×

瑞枝「……うっちーの気持ちは嬉しいけど……私、うっちーの期待には答えられない……」

雅也「（苦笑して）分かってた、どうせそういう答えになるってことは」

×　×　×

瑞枝「私、自分に自信がないの。だから、うっちーみたいな素敵な人にそんなこと言われて、すごく嬉しい。励みになる」

雅也「……」

瑞枝「でも、うっちーとは腹を割って話せる、素敵な友達っていう関係性でいたいの。そのほうが、お互いのために一番良いと思ってる。うっちーが嫌いなわけじゃないから、それだけは誤解しないでよ」

雅也「分かってる……分かってる……」

×　×　×

お互い涙を浮かべると、優しく抱き合

う。

雅也「三年間、ありがとう……」

瑞枝「こちらこそ……うっちーと友達になれて良かった……」

雅也「みずちゃん……」

瑞枝「うっちー……」

10　居酒屋（回想戻り）

雅也「……俺も、今となっては、何であんなこと言ったんだろうって思ってる」

瑞枝「自分に自信がない私にとっては、うっちーみたいな人に告白されて、自信に繋がったけどね」

雅也「事業を始めてからのこの約九ヶ月、自分のことで精一杯で恋愛なんてしている暇はなくってさ、とてもじゃないけど、恋人のために時間なんて割けなかった。もし付き合ってたら、とてもじゃないけど、みずちゃんを幸せにはできなかったと思う」

瑞枝「私もさ、仕事でバタバタして恋愛どこ

ろじゃなかった。うっちーの彼女なんて、務まらない」

雅也「俺だって、もしみずちゃんと付き合って、お互い変な風になって関係性が悪化したどうなってたか……。今日みたいなこういう会にも、呼ばれなくなっちゃうだろうしね。やっぱりあの時、俺たち付き合わなくて良かったんだよ」

瑞枝「そうだよね。私とうっちーは、学生時代で過ごしたあの関係性が一番良いんだよね。会えるときに会って、どっかご飯行ったり飲みに行くときもお互いの予定が合うときだけにすればさ。もし付き合ってたら、やれデートだの、ご飯だのって、遠距離恋愛でもいろいろお互いに気を遣うことが多すぎて、とてもじゃないけど今の私にそんな余裕は持てないし。まあそれは、うっちーも同じかもしれないけどさ」

雅也「そうそう。みずちゃんは、俺にとっては大事な人だけど、付き合うとかそういう

煩わしい関係より、さっぱりというか、やっぱりこういう関係が一番だよね。気楽で良いし」

瑞枝「そうそう。これは悪い意味じゃないけど、うっちーに変に気を遣いたくないしね。今の関係性が一番良い」

雅也「うん。『とんちゃん』は、また行けるときに行こう。大将や若女将も待ってるから」

瑞枝「必ず行こうね。約束だよ」

雅也「もちろん」

微笑み合いながら、酒を飲み干す雅也と瑞枝。

つづく